



『猪飼野いかにの詩集』などで知られる在日の詩人・金時鐘キムシジョンさん（86）＝写真＝が、回想録『朝鮮と日本に生きる』（岩波新書）を刊行し、韓国・済州島チェジュドで1948年に起きた「四・三事件」との関わりをつづった。

「苦難の故郷を見捨てて逃げを打ったことは一生の負い目」と長く沈黙してきたが、その体験は金さんの紛れもない“詩のありか”でもある。

四・三事件は、同年4月3日の反体制派弾圧事件。南北分断の固定化につながる南朝鮮の単独選挙を阻止しようと、民衆が武装蜂起し、軍や警察の鎮圧部隊に数万人が殺された。19歳の金さんは、武装隊を率いた南朝鮮労働党の一員だった。襲撃先の郵便局では、同志が目の前でカービン銃で撃たれ、自らも追われる身となった。翌年5月、日本行き密航船に乗り込み、大阪・生野のコリアンタウンに行き着いた。

〈春は 喪の季節です。／甦よみがえる花は きつと／野山に 黒いことでしょう。(略)／／私は一本の つつじの花を／胸にかざるつもりで います。／砲弾の くぼみに咲いた 黒い花です。〉

55年に出した第1詩集『地平線』で焦土と化した故郷を悼んだが、自らの関与には触れていない。「軍事政権下の韓国に強制送還されれば、事件の残党ということでもまず命はなかったやろうから」。日本に来た理由は「よんどころない事情」としたままだったが、ゆるぎない詩人の言葉で「在日」を生きる意味をとらえてきた。「そうでないと、民族意識に目覚めたことも、事件に関わったことも、自分にとって何のよすがでもないことになる。空虚だよ。知った者が、知らない形は取れないのよ」

韓国の民主化が進んだ90年代以降、事件の検証が進むにつれ、講演や対談の場で体験を語り始めた。2010年の詩集『失なくした季節』では当事者としての心情を率直に表現した。

〈ぼくの春はいつも赤く／花はその中で染まって咲く。(略)／／世紀はとうに移ったというのに／目をつぶらねば見えてもこない鳥が／記憶を今もってついでに生きています。(略)／／木よ、自身で揺れている音を聞き入っている木よ、／かくも春はこともなく／悔悟を散らして甦ってくるのだ。〉

改めて文章に書き残したのは、「80も半ばを過ぎて、自分の整理をしたようなもの」。苛烈な生を支えたのは、密航船の手配を整え、一人息子を逃がした両親の存在だった。「まるで鳥がひなを育て、巣立たせるような見返りのなさ。それは、愛の全くの原型なんだよ」。朝晩、遺影に向かってあいさつを欠かさないという。 (大阪本社 文化・生活部 中井道子)